

# 創造的な空白——トリン・T・ミンハ夜間セミナー報告

石川裕子

今日のジェンダー研究の主要なアプローチとして、〈男性的なもの／女性的なもの〉を初めとする、権力関係を伴う〈二項対立〉を基盤とした西欧的な思考体系を問い直すという姿勢がある。アメリカにおいて、ポストコロニアル・フェミニズムと呼ばれる思想の中に、そのような側面を見いだすこともできるだろう。本論では、ポストコロニアル・フェミニズムを代表する理論家であり、外国人客員教授として当研究センターに赴任していたトリン・T・ミンハ<sup>1</sup>の夜間セミナーの内容を、〈男性的なもの／女性的なもの〉について西欧的二項対立をどう崩していくかという視点に絞ってまとめ、その思想の創造性、可能性について論じたい。

夜間セミナー（第1回～第4回）は、それぞれ、“Outsider Insider”、“Politics of Naming”、“Politics of Informing”、“Storytelling”というタイトルで催された。各回の内容は、トリン自身も述べたように、相互に密接に関連した連続体でありながら、決して思想の可能性を制限することなく、様々な文脈の中で様々に響き合う<sup>2</sup>ような、創造性豊かな思想を表現したものであった。それゆえ、ある一つの概念について、どのような切り口で思考しても、その概念は、様々な背景の中で様々な側面を明らかにし、思想に広がりを与えながら、依然として一つの全体を提示するものとなる。また、逆に、ある背景では無関係に見える幾つかの概念が、切り口を変えることにより、相互に密接に結びついたものとなり、新たな思想領域を浮かび上がらせるものとなる。本論では、ジェンダー研究に照準を合わせるため、セミナーの内容を、「ジェンダーという概念」、「主体（主観）性」、「空白の領域」の三点に照らして論を進めることにする。

ジェンダーの概念を、トリンは、どのようにとらえているのだろうか。セミナーにおいて、内／外（inside/outside）の概念、位置付けることの意味について語る中で、トリンは、ジェンダーの違いに触れて以下のように語っている<sup>3</sup>。女性であることを語る時、それは全く、男性のカテゴリーの外側にいるのか。女性のセクシュアリティとは、何を意味するのか。我々（女性）は全く（男性のセクシュアリティに対して）外部者（outsider）であるのか、それとも、どこか一部は、内部者（insider）なのか。また、精神における内／外について、西欧文化は、自己でない外部を征服し、支配し、拡大するという考え方を肯定的に認識する傾向があるが、東洋の文化、思想では、内に向かえば向かうほど外へ向かうという考え方をすると述べている。内と外は、決して確固とした境界線を持つものではなく、内の中に外があり、外の中に内がある。よって、アイデンティティについて思考するとき、自己の内面を探れば探るほど、個人的なものと同時に、社会的、伝統的な側面が明らかになる。また、背景、文脈に連動して、意味内容も変化するという響き（resonance）の概念<sup>4</sup>や、同一の場に帰っているように見えても、決して同一の場には帰っていかないというノマド<sup>5</sup>の概念、さらに、絶えず変化する動きによって中心を志向するシステムが瓦解するというリゾーム<sup>6</sup>の概念など、トリンの思想全体に密接にかかわっている、何事も決して普遍のものとして決定されないという思考に照らすと、男性主体のアイデンティティ、女性主体のアイデンティティは、それぞれ、女性的なもの／男性的なものという決定的な基本概念の存在によって見いだされるのではなく、男性的でないもの、女性的でないものも同時に決定しながら、その時々の場において存在すると考えられる。つまり、『女性・ネイティヴ・他者』の中でトリンが述べているように「性差は絶対的な価値ではなく、各主体がおこなう実践の内部に宿るもの<sup>7</sup>」なのである。

また、トリンは、同書の中の「差異—〈特別な第三世界の女の問題〉」で、女のアイデンティティの閉塞について述べている。ジューディス・キーガン・ガーディナーが、女のアイデンティティという概念について、女に

よって書かれた現代作品の特質を理解するときの鍵となり、女の著作と男の著作のあいだの様々な差異を理解するときの鍵となると考え、両者の差異の根本要因として、「女のアイデンティティはプロセスだ」という仮定を出していることに対して、それは、結局は、男のモデルを必要とする思考の結果であり、女のアイデンティティを主体化／隷属化 (subject) したにすぎないと批判している。そして、本当に必要なことは、核心という概念やアイデンティティという概念などの、「そのものの鎧を、辛抱強く外していくこと」(96) であるという。

鎧を外していくとは、具体的にはどのような作業なのか。これには当然、無数の答え方、表現法があるだろうが、その一つを挙げてみる。セミナーの質疑応答の中で、以下のような質問があった。「女性学」という領域のあり方が、その命名法をみても、「女性」というカテゴリーを前提としている点において問題視する声もあるが、これについてどのように考えるか。これに対してトリンは、女性というカテゴリーと思考体系との関係を、〈不適切な／領有されない他者〉 (inappropriate/d other) という概念を挙げて答えている<sup>7</sup>。不適切な他者 (inappropriate other) というのは、そもそも、他者と断言されるような存在は可能かという、「他者」というカテゴリーを内包する、西欧的思考体系自体を客観視した表現である。「他者」は、他者というカテゴリーを設定している権力構造の中で存在するものであり、絶対的に位置付けられているものではなく、他は主を主とするために存在する。トリンのスラッシュを使った他の表現と同様、この概念も、スラッシュの前後の語は、個別の意味を持ちながら、相互に深く結び付いているのだが、不適切な他者は、後者の領有されない他者 (inappropriated other) とも関係してくる。

後者の、領有されない他者というものは、他者の領域で内部者 (insider) として声を発して、支配体系にその声を批准、確認されながら (validated) も、カテゴリーの境界線をずらしつつ、新たな思想空間に移動し、決してカテゴリーの中に封じ込められることのない他者である。トリンは、他者性とともに生きる方法は多様であると述べている。そして、女性というカテゴリーについて説明するとき、wo/man と表現する。女性という概念は、男性というカテゴリーを含む思考体系において使用されるからだ。女性について語る時、戦略として、どのような位置付けで語るかを主張することになるが、黒人、黄色人種、日本人など、位置付けを特定して語るとは、結果的に、権力構造における周縁化の体系について語ることになる。そして、周縁の内部者として語れば、その立場に権能を与えることになると同時に、その声は、たちまちその体系に取り込まれる。女性学のあり方についてのトリンの論を、〈不適切な／領有されない他者〉という概念を通してまとめると、女性学には、女性というカテゴリーを通して、様々な周縁化の体系を明らかにし、それと同時に、そのカテゴリーに領有されないように、権力構造の中で、不可視性そのものの可視的表象、あるいは、可視的なものの中にある不可視性に取り組むことによって、その構造を解体してゆき、周縁化の体系と女性というカテゴリーとを問い直していくという役割があると言える。このような姿勢が、アイデンティティという概念そのものの鎧を、辛抱強く外していく作業に結びつくと言えるだろう。

それでは、主体 (主観) 性について、トリンはどのように理解しているのだろうか。トリンは、新しい主体 (主観) 性の形として、最終的に総合的に構築される何かではなく、何度も回帰しながら姿を変え続ける「無形の形」や、同一性と他者性の不可分性、個人的であることと社会的であることの不可分性など、二項対立の常識に挑むような概念を挙げている<sup>8</sup>。主体性と主観性は、原語は subjectivity であるが、ここでは、文脈の便宜上、訳し分けることにする。まず、主観性に関しては、トリンは、映像作品の鑑賞を例に挙げ、中心と周縁の関係をを用いて説明している。セミナーでは、*A Tale of Love* (『愛のお話』)<sup>10</sup> の一部を、中心的な筋書きを設定していない作品として上映し、多様な切り口によって、その都度別の周縁にかえっていき、中心がずれていくという考え方や、あるいは、リズムの概念に見られるような、複数の中心と周縁との関係から形成される考え方を説明している。物語に始まりや終わりを設定していない、直線的でない点、明確に人物関係を説明していない点、登場人物の行動の理由を特定していない点などは、その作品を見るたびに新しい解釈を促し、その都度さまざまな主題を読み取る可能性を、無限に広げる表象の例である。

また、トリンは、主体性という概念について、純粋な起源や本物の主体というのは、西洋特有の二元論的な思考体系であり、「私」というのは、それ自体が無限の層であると述べている。《私》、わたし、あなた、彼女、《私たち》、わたしたち、彼／女ら、女／男の本質は、重なり合っており、その境界線は明確にはなりえない<sup>11</sup>。これは、個人にだけあてはまるのではない。例えば、フェミニストたちの異種混濁的な闘いについて語っている中でも、無限の層をもつ主体という考え方が説明されている。トリンは、『月が赤く満ちるとき』の「黄色い新芽」において、多様な声を反映するフェミニストたちの企てに関して、女性もしくは有色人種としての運命を生きることを、一度限りの定義で済ませることは不可能であると述べている。「言葉は、伝達可能なものを伝達するための手段であると同時に、伝達不可能なものを象徴するものでもある」というヴァルター・ベンヤミンの表現を引用し、統一的主体というものや、そのような主体の一枚岩的な構造の不毛さゆえに、固定化した定義で何かを語り続けることは不可能であるという<sup>12</sup>。その中では、主体を説明する定義を固定化しないこと、あるいは、フェミニストたちの企てという文脈で換言すれば、一つの動かぬ同盟関係を結ばないことが、逆説的に新しい同盟を作り出す<sup>13</sup>。その同盟は、内部の差異から発生し、移動する境界線を横断する。並列的に手を結ぶことは、前進するための手段ではあるが、それを固定化せず、常に内部の差異に耳を傾け、新しい同盟をその時々で作りに出していく。このこと自体が、新しい同盟関係のあり方である。

トリンは、主体の無限の層、内部の差異に関して、ホミ・バーバの考えるハイブリディティの概念にも言及している<sup>14</sup>。1980年代の終わりに、ハイブリディティ（雑種性）という概念は支配的イデオロギーに取り込まれた。例えば、美術館などで、ある種の作品が、ハイブリディティを表現する作品として展示されるなど、文化的多様性（cultural diversity）を示すものとして流用されている。ここでいう文化的多様性とは、商品化され、生活を脚色するものであり、支配的な位置付けにある文化に対して挑戦的な要素のないものである。これに対して、文化的差異（cultural differences）は、支配的文化に挑みかけるものであり、ハイブリディティという概念による商品化を避け、ハイブリディティとともに生きていくための、創造的な道具となるものである。それは、どのようなカテゴリーにも永久的に位置付けられることはなく、常にカテゴリーを逃れるものであり、それゆえ、単純に提示されるものではない。しかし、だからと言って、決して混沌としたものではない。創造的な道具にするとは、概念の枠にとらわれるのではなく、さまざまな角度で差異を臨機応変にとらえなおし、それぞれの立場を生きてゆくうえで、役立つものとするところである。前述の、新しい同盟関係のあり方は、その例として挙げることができるだろう。

さて、これまで述べてきた中には、「女性的なもの／男性的なものは、男性的でないもの／女性的でないものも同時に決定する」という概念や、「その時々で作りに上げてゆく新しい同盟関係」という考え方などがあった。これらは、その根底に、見えているものとそうでないもの、あるいは、意識的領域とそれ以外の領域という概念があり、女性学についての質疑応答の箇所而言及した「不可視性そのものの可視的表象」、あるいは、「可視的なものの中にある不可視性」に通じるものである。これらは、ある事柄に注目して何かを定義したり、分析したりする場合に、見えていない事柄についても必然的に決定がなされるというもので、決して二元論的な発想のものではない。切り口を変えることによって、可視的なものと不可視性について思考することを、具体的に理解しやすくするための例として、セミナーでは、「沈黙」という概念が挙げられた<sup>15</sup>。「沈黙」は、「無音」、「無声」というように、「無」と結び付けられることが多いが、女性の抵抗としての沈黙や、ジョン・ケイジの演奏をしないコンサートなど、特定の状況下では、より積極的な意味をもち、コミュニケーションの可能性をひろげるものである。「沈黙」を「音」、「声」に対する「無」としてとらえるなら、「音」、「声」と「沈黙」との関係は「有」と「無」との関係になる。それは、視覚的現象に置き換えるなら、「可視」と「不可視」との関係に置き換えられるだろう。我々は、日常的には可視的領域を中心に思考するが、可視的な領域は不可視の領域と共時的に存在する。冒頭で挙げた「空白の領域」は、ここで述べた「不可視の領域」、「無の領域」である。

ある視座で何かを認識するときに、別の視座でしか見えてこないものは、「空白の領域」に委ねられる。表象

によって現実を知ろうとする場合、西欧的な思考では、その表象が明白かどうか、把握しやすいかどうかを基準として、より「現実的」かどうかを判断することが多いが、その「明白さ」や「把握しやすさ」自体が、既に人の主観を媒介したものであり、それらが真に現実を知るための基準とはなり得ない。真の「知」とは、無限の広さをもつ海のようなものであるとトリンは言う<sup>16</sup>。人は、知識を伝達するために、始まりと終わりをつけるが、実際には、常に未知の領域、「空白の領域」を残す。トリンは、意味と真実との間の間隙について以下のように説明する<sup>17</sup>。人は、ある一つの意味を読み取って、それを真実と認識しがちだ。真実とは、その時々々の権力体制が生み出すものであると言えるが、その一方で、真実は、真実の制度を逃れるものでもある。間隙は、意味や真実が固定した枠内にとらわれるのを逃れさせる。ある一つの意味が真実と認識される場合、その背後にある権力体制は、どのようなものであるのか。また、その場合の、意味と真実との関係はどのように決定されているのか。この意味と真実との間の間隙について読み解いていくという姿勢は、ジェンダーに関して先に述べた「アイデンティティという概念などの、『そのものの鎧を、辛抱強く外していくこと』という姿勢や、主体性に関して述べた「内部の差異に耳を傾け、新しい同盟をその時々で作りに出していく」という姿勢と通じるものである。そして、「空白の領域」は、既にそこにある何かではなく、対話的に変化していく領域とも言える。

映像作品にしろ、著作にしろ、あらゆる表現、表象には、「音」、「沈黙」、「声」、「色」、その他の無数に分類される現実が同時に存在しており、それらはそれら自体に意味があるのではなく、発信者と受信者の、相互のコミュニケーションによって成立している。例えば、トリンは、映画を解釈するという行為は、製作者の意図を読み取ることに限られるものではなく、製作者と観客が密接に関わりあう、より創造的な行為だと言う<sup>18</sup>。そして、その創造的な行為について、以下のように述べている。

創造的に仕事をするということは、必然的に変化を生み出すことを意味する。創造するということは何か新しいものを作り出すというより、むしろ新しい場所に移動することを意味する。それも、より些細な場所からより高次元のすぐれた場所に移動するのではなく、たんに別の場所に移動することを指す。私がたまたま何かを新しく創造したとすれば、その行為の一つ一つが個人的レベルでは歴史的な経験を生み出すことになる。それは古い問題を説き明かすと同時に、新しい疑問を作り出すことでもある<sup>19</sup>。

これは、映画製作について語っていることであるが、これまで述べてきたように、ある視座では見えなかったものを意識させ、また、なぜそれが見えなかったかを考えさせながら、新しい思想空間を開いてゆくという態度である。そこには常に「空白の領域」が存在するのである。言い換えれば、その思考は、絶対的価値基準に照らさない、常に創造的空間を切り開くものである。「空白の領域」は、トリン・T・ミンハの思想の創造性を物語る一要素と言える。

さて、これまで述べてきたことを、より具体的に説明するために、『月が赤く満ちる時』の「黄色い新芽」における、「月」に目を向けてみる。トリンは、「黄色い新芽」の中で、ロゴスの領域、ミトスの領域<sup>20</sup>における月の姿や、中国の芸術、文化における月の役割と、それに伴う社会的意味付けについて語っており、中国の詩に多くみられる月と女性の肉体との結び付きについて言及した後、「彼女は月であると同時に月ではない」<sup>21</sup>と表現している。それは、どのようなかたちで月が言語と関わっており、どのように表象されているかによるのだ。月が太陽との関係において定義され続ける限り、女性は月であることを拒否するが、その一方で、女性と月は、共通の姿をもつ。それは、入り口も出口も光も影もなく、あらゆる意味を内包する円環の中で新しく生まれかわる女性の姿と、陰と陽、静と動という対立するもの同士の結び付きと、親密なもの同士の結び付きの両方を表す満月の姿、また、その満ち欠けする姿である。中国において、月に、正と負の両方の意味を与えることとなった、月の再属領化と脱領域化や、月をめぐる意味上の争い、また、「誰にも家主としての占有権をあたえることはできない」「空っぽの宿主としての中心」<sup>22</sup>であるという月の存在は、様々な意味を与えられ、二元論的領域では自分の場をもたず、一つ以上のすでに占領された領域を交差する女性という存在、「次から次へと果てしなく手渡

される贈り物」<sup>23</sup>でも安定しない存在と重なりあう。

「彼女は月であると同時に月ではない」というトリンの表現は、意味と真実との間にある間隙を可視化するものである。月が表すもの、女性という存在が表すものの背景にある権力体制はどのようなもので、そこではどのように意味が決定されているのか。視座を変えることによって新たな思想領域が開かれ、古い問題が解明されると同時に、新たな疑問が生まれ、女性という存在は新しく生まれ変わる。そして、新たな思想領域を切り開きながら、その位置は移動し続ける。トリンは、女性という存在の位置（のなさ）について、必然的に固定された境界と境界との間でたえず位置を変えている文脈上の間隙にある<sup>24</sup>と説明する。

この女性という存在の位置（のなさ）が、巧妙な即戦力ともなり得るのは、先に説明した「新しい同盟関係」という概念からもうかがえるが、エクリチュールについてのトリンの考え方からも具体的に読み取ることができる。思想表現としてのエクリチュールにこだわり、＜女性のエクリチュール＞の実践を主張するエレヌ・シクスーが、中性を装う男性のエクリチュールを、女性を用いるべきではないと主張しているのに対し、トリンは、ルモワール＝リュシオーニの言葉を借りて以下のように述べている。「『中性的』な段階にあっても、女性作家は『真似をしているのではない。彼女は[自分が模倣している]男性そのものになる。ただし、男性の状態にのみとどまることもけっしてない』<sup>25</sup>」と。女性作家が中性的エクリチュールを用いることは、「可能性の一つを解放する<sup>26</sup>」ことに結びつく。＜不適切な／領有されない他者＞として、主人の言葉を使いながら、巧妙に中心をずらしてゆくのだ。

トリンは、『月が赤く満ちる時』の「黄色い新芽」の中で、オードリ・ロードの言葉を引用しつつ、ジェンダー概念の普遍化に向かう動きを批判している。

特定の運動における一つの集団が力の行使に傾いたり、自分たちとは異なる危急のことがらに関心を寄せる別の女性の集団をしりぞけ、恣意的に『女であること』の意味を決定したり、女性性の『真実』がなんであるかを主張したりするときには、しばしば閉塞—効果もたらされ、そのため彼女たちの運動はたえずはばまれる。そうした閉塞—効果を無効にするには、各人が自らの奥深くに植え込まれた『自分のなかの抑圧者としての部分、抑圧者の戦術と抑圧者との関係にだけ通じている部分』を何度も認知しなおす必要がある。(p. 8)

これは、フェミニズム思想の中の、女性性を巡る議論について述べていると考えられる。男権社会の権力構造を分析し、被抑圧者として声を発したり、その声に耳を傾けようとする動きの中で、ある一つのフェミニズム思想を、他のフェミニズム思想より正しいとする姿勢は、それぞれの立場を権力構造の中に位置付ける姿勢であり、フェミニズムの存在理由に矛盾する。男権社会の抑圧構造を分析し、女性解放を目指す動きの中で、その同じ抑圧構造を自らが再生産しないためには、絶えず、「自分のなかの抑圧者としての部分」に注意を払うべきだろう。既存のカテゴリーや思想枠を取り払い、新たな思考体系を創造しようとして、再び同じ抑圧構造を生み出すという閉塞状態を避けるためには、解明しようとする抑圧構造やそこにある思考体系と自己との距離を、対話的に、動的に把握し、「不可視のものの不可視性」を解明しながら、「常に新しい批評空間を開いていく」ことが重要である。そして、新しく開かれる未知の領域、空白の領域は、思想の柔軟性を刺激し、無限の創造性を秘めていると考えられる。

(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター研究機関研究員)

## 注

1. お茶の水女子大学ジェンダー研究センター外国人客員教授（1998年5月～8月）。
2. 1998年5月27日、セミナー第1回。
3. 同セミナー。

4. 同セミナー。
5. 同年6月3日、セミナー第2回。
6. 同セミナー。ドゥルーズとガタリで知られる概念であるが、もともとアジアに存在した概念であるとトリンは語る。
7. Trinh T. Minh-ha, *Woman, Native, Other: Writing Postcoloniality and Feminism* (Bloomington: Indiana University Press, 1989), p. 103. [トリン・T・ミンハ『女性・ネイティヴ・他者—ポストコロニアリズムとフェミニズム』竹村和子訳、岩波書店、1995年] 本論の引用文などは翻訳書を参考にした。
8. セミナー第2回。
9. *When the Moon Waxes Red: Representation, Gender and Cultural Politics* (New York: Routledge, 1991), p. 192. [トリン・T・ミンハ『月が赤く満ちる時—ジェンダー・表象・文化の政治学』小林富久子訳、みすず書房、1996年] 本論の引用文などは翻訳書を参考にした。
10. Written and edited by Trinh T. Minh-ha. Co-directed, lighting design and production design by Jean-Paul Bourdier. Director of photography: Kathleen Beeler. Cast: Mai Huynh, Dominic Oversyreet, Juliette Chen, Mai Le Ho.
11. トリン『女性・ネイティヴ・他者』pp. 146–150.
12. トリン『月が赤く満ちる時』pp. 8–9.
13. セミナー第1回。および、トリン『月が赤く満ちる時』p. 9.
14. セミナー第1回。
15. 6月17日、セミナー第4回。
16. 同セミナー。
17. セミナー第3回。および、トリン『月が赤く満ちる時』p. 40.
18. 同セミナー。および、トリン『月が赤く満ちる時』pp. 157–158.
19. トリン『月が赤く満ちる時』p. 157.
20. 但し、ロゴス、ミトスという表現は、「黄色い新芽」ではなく、セミナー第1回においてなされた表現である。
21. トリン『月が赤く満ちる時』p. 5.
22. 同書p. 7. ただし、「空っぽの宿主としての中心」(“empty host-center”: 原著 p. 5) という訳は筆者による。
23. 同書p. 9.
24. 同書p. 5.
25. 同書p. 182. 引用中の二重括弧は、トリンが引用している Eugene Lemoine-Lucioni の言葉。
26. 同書p. 182. トリンが引用している Eugene Lemoine-Lucioni の言葉。

## 参考文献

- Trinh T. Minh-ha. *Woman, Native, Other: Writing Postcoloniality and Feminism*. Bloomington: Indiana University Press, 1989. [『女性・ネイティヴ・他者—ポストコロニアリズムとフェミニズム』竹村和子訳、岩波書店、1995年]
- . *When the Moon Waxes Red: Representation, Gender and Cultural Politics*. New York: Routledge, 1991. [『月が赤く満ちる時—ジェンダー・表象・文化の政治学』小林富久子訳、みすず書房、1996年]
- エレヌ・シクスー、「エレヌ・シクスー、ルーツを撮る」松本伊瑛子訳、『女たちのフランス思想』所収。勁草書房、1998年。
- . 『メデューサの笑い』松本伊瑛子、国領苑子、藤倉恵子共編訳、紀伊國屋書店、1993年。
- 棚沢直子編『女たちのフランス思想』勁草書房、1998年。